

学級づくりの過程の省察的分析に基づく実践の構築

—「集団としての目標・ルールづくり」ならびに

「児童の多面的な自他理解による関係形成」をめざして—

専攻 教育実践高度化専攻
コース 心の教育実践コース
学籍番号 P080461
氏名 高尾一二三

問題と研究の目的

集団の中で育つはずの子どもたちが、集団の中で、規範意識や意欲の低下・人間関係形成の困難等様々な問題を発している。学級によって子どもの諸特性に顕著な差異がないことを考えると、これらの原因が教師の教育的営為の中にも存在すると考えられよう。本研究は、学級担任としての筆者が、学級づくりの要諦とされる「集団としての目標・ルールづくり」と「児童の関係形成」をめざして仮説を基に意図的な実践を行い、その省察的分析を通して学級づくりに関する知見を構築することを目的とする。

2つの視点からの仮説

①集団としての目標・ルールづくりについて

学級集団と学習の質を高め、児童の意欲を喚起させるものは、その目標であり、ルールはその達成のために必要であると考えられる。学級においては、目標やルールの構築・浸透の仕方が、集団としての機能に影響を及ぼす。筆者は、それらを意味ある理由づけを伴って児童自らがつくる手続きが効果的であると仮定した。

②関係づくりについて

学級においては、課題遂行過程で相互作用と自他理解が絶えず繰り返され、互いに影響を及ぼし合っている。言い換えれば、教師の提示する課題の内容と遂行の仕方が児童の自他理解に影響を与えることになる。特に、課題遂行過程で生じる個人差の顕現化が、児童に一面的な自

他理解を固定・強化させていないだろうか。良好な関係形成のためには、相互作用にはたらきかけ、多面的な自他理解を促していくことが必要になる。そこで、山中(2008)の指摘する「相互依存性」と「多彩性」を課題に内包させ、児童に「価値の視点の広がり」「自分や他者の個人内変容への気づき」「他者や集団に対する寄与への気づき」を促すはたらきかけをしていくことで、児童の多面的な自他理解が促進され、良好な関係が形成されていくと考えた。

実践と省察

研究Ⅰ：学級づくりの過程に関する分析的検討

教師という専門職の行為の中心は、「実践」と「省察」である。筆者が担任する4年生の学級において、仮説を基に意図的な実践を行い、その意図と効果を自身が時系列で言語化していくことで、学級づくりに関する知を構築することを目的とする。日々様々な課題を提示しているが、4月から12月まで、特に問題の改善や学級の向上をめざして取り組んだ課題を記述していき、2つの視点から仮定を基に実践のとらえ直しを行った。

研究Ⅱ：実践の構築

体育科「チーム全員でゴールをめざそう
～連けいのアイスクャッチ・セストポートボール～」
教科目標の達成を図りながら、目標やルールを児童たちがつくり、多面的な自他理解を促す

ための相互依存性と多彩性を備えた単元を構築することを目的とする。能力差が顕著に現れそれが勝敗に影響を与える体育科のボールゲームにおいて、仮説に基づく目標・ルールづくりや課題の内容・遂行方法を工夫し、児童の主体的学習と多面的な自他理解による良好な関係形成をめざしたいと考え、実践を試みた。

研究ⅠとⅡを通覧して得た知

①集団としての目標・ルールづくりについて

学級目標や単元を貫く目標が、学級集団の質とそこで営まれる生活や学習の質を規定する。課題提示する際に目標提示とその意義づけも行い、達成のために必要な行動を共通理解させることで児童の意欲が高まり、意識や行動が変わる。ルールは目標を基につくる手続きが効果的だが、その主体は、教師・児童・両者の共同が考えられる。児童自らつくることが、意欲の喚起・目標やルールの浸透・結果への責任意識の点で一番有効であると思う。しかし、ねらいに迫るための教師の意図を内包させるため、教師からの提示が有効にはたらく場合もある。要は、指導者として自己のめざす目標をはっきり見据え、児童に対してその意義づけとフィードバックを行うことである。

②児童の多面的な自他理解による関係形成について

児童の自他理解に多面性をもたらすはたらきかけは、児童の自尊感情を高め、良好な関係を導くと言える。自他理解は相互作用を通して絶えず成されているため、どんな相互作用を生じさせるか、課題の内容と遂行方法について、指導者としての工夫が求められる。課題に相互依存性を内包させることで、他者や集団に対する寄与や集団的達成感が導かれた。自他理解に

多面性をもたらすためには、児童がもつ様々な個性や能力を発揮できるように、課題に多彩性をもたせる努力と、価値の視点を広げるものの見方を与えることが必要である。筆者は、児童の価値の視点を広げるために、自己の変容や自分が他者に対して行った寄与に気づくこと、失敗が新たな学びをもたらすことや努力の過程に意義があること等認知の変容を図るはたらきかけを行った。そのことが、自分に対する肯定的な見方をもたらす一因になったと思われる。また、子どもの方が友達のことをよく知っていて、教えられることがある。ただ、一面的な価値の視点によってその認知が固定・強化されることが問題になる。友達の個人内変容や集団に対する寄与に気づくことも、固定的な他者認知を和らげ、関係形成によい効果をもたらすと感じられた。また、何より教師の多面的な児童理解とそれをめざす努力が、教師のつくる課題や指導行動に反映され、児童の多面的な自他理解を促し、良好な関係形成をもたらしていくのではないかと思われる。

学校現場への示唆

筆者の仮定は、実践を言語化する省察的分析を通して効果と課題を明らかにできたが、得られた知は誰にとっても効果的な具体的方策ではない。担任と児童たちの特性が影響を及ぼし合う個別性の強い学級経営においては、各々が省察を通して自覚的になり、知と実践を構築していくことが求められる。そして、教師たちが自身の省察を通して得た知を基に互いに議論することで、自分に合致した新たな知と実践の構築が生まれるのではなかろうか。

修学指導教員 山中 一英